

セカンドライフ

(一)

前の晩、顧客に誘われるままに酒場を数軒回ったためか、朝のうちは頭が重かった。遅れて出社した西本正治の机に、監査役の鹿内からのメモが置いてあった。大学の先輩ではあったが、日頃、会議で顔を合わせる以外には鹿内とは殆ど交流がなかった。何だろう、と思いながらダイヤルを回した。

「ご連絡が遅くなって申し訳ございません」型どおりの挨拶から入った。

「あなたにお願いたいんだけど」鹿内が丁寧に切り出してきた。

鹿内は長年経理部門に所属し、規則通りに厳しく仕事をする事で知られていた。西本よりは大分年長であったため、直接仕事で遭遇したことは無かったが、鹿内の豪腕振りは、どこからともなく伝わってきていた。

鹿内と西本は共に二年前に、子会社のネット企業に向向してきた。西本はネット利用者の入会促進や、利用者向けに情報を提供する仕事を担当していたが、新しいビジネスだけに制度も整っておらず、見切り発車で仕事を進める事が多かった。脛に一つや二つの傷を抱えて

いた。

「私の同窓生で中小企業診断士をやっているのがいてね、それから頼まれたんだけど」込み入った話では無さそうなので、ほっとした。

依頼主が診断士仲間の勉強会の幹事をやっていること、勉強会の次回のテーマに、『電子メールを使った仕事術』が候補として上がっていること、ネット企業の監査役の自分を頼って講師の打診があったこと、と経過が述べられた。

「そこだけでも、折角の機会なので、あなたの方で引き受けて貰えないだろうか」予定が重なっていかない限り受けよう、と思った。

会費で賄っているので薄謝らしいがいいか、との確認もあった。勉強会は一カ月後の土曜日、西本に他の予定はなかった。

「それでは、幹事の中山君からあなたに直接、電話かメールがあると思っけど宜しく頼むね」鹿内も友人からの頼まれ事に応えられて、ほっとしている様子であった。心なしか、電話の先で言葉が弾んでいるように感じられた。西本にしても、この程度の事で役に立てれば、うるさ型の鹿内に恩を売っておけば、何かの時に返しがあるかも知れない、との計算が本能的に働いていた。

その日の中に中山から電話で挨拶があった。事務的な事は電子メールで送られてきた。西本からは、スライドを映す機械やスクリーンなどについて確認のメールを返送した。

勉強会は新宿副都心の一角にあるビルの中の、住友系の企業が共同で運営しているセミナー・ルームで開かれた。鹿内の同窓生が中心となっている勉強会だけに、受講者には年配の者が多かった。講演する側としては、受講者の反応が何かと気になるものだが、勉強家が多いせいも、年齢層が高いにもかかわらず、この日の反応はまずまずだった。

西本はすっかり気をよくして、誘われるままに、後の懇親会にも出席した。懇親会は立食形式で、料理はこの種のパーティーとしては中々の内容であった。何人かと名刺交換したが、一気に複数の人と応対したので、誰が誰だか分からなくなってしまった。

数日後に、『メディア・ネット代表 大島昇』と差出人を記した案内状が届いた。西本には心当たりがなく、捨てようと思ったが、怪しげな商品売買の勧誘では無さそうなので開けてみた。中身は、雑誌編集者の講演の案内で、大島は出版社とライターの仲介業務をやっているようであった。

『先日は講演ありがとうございました。よろしければご出席下さい』と添え書きがあった。

西本は名刺入れを取り出し、先日交換した名刺を調べてみた。その中にみつけた大島の名

刺には案内状に記載された通りの肩書が書いてあった。

返事も出さずにいたが、毎月定期的に講演会の案内状が送られてきた。三回目には送られてきた案内状を開いたところ、西本の会社のネットで情報を提供している月刊誌の編集長の名前が講師欄に記載されていた。

出席者は、自己PR文を四十字以内にまとめ、申込時に郵送または電子メールで送るルールになっていた。西本は会社名と役職など、名刺に記載されている内容に一言加えただけの簡単な紹介文を書いて送った。

会場は高田馬場駅近くの、公認会計士が経営している専門学校が教室が使われた。高田馬場で降りたのは、大学受験の時以来だろうか。地図に従って、駅前の横断歩道を渡り、商店街の雑踏の中を進んだ。暫く歩き右折すると、急に薄暗くなり、神田川を渡った先に専門学校の看板が見えた。

受付で会費の五千円を支払うと、出席者の一覧表が手渡された。

「前の方から詰めて座って下さい」受付の女性が案内してくれた。

どこかで会ったことがあるな、と西本は思った。いや、誰かに似ているだけかも知れないが、その場では直ぐには思い出せなかった。出席者一覧表に目を通して見たが、元々、顔と

名前が一致しないのだから確認する術はなかった。

月刊誌編集長の話は、掲載記事に対する警察庁や宮内庁、右翼団体からのいちゃもんや抗議と、臨場感溢れる応対の話が多く盛り込まれていて面白かったし、西本に取っては新鮮であった。

話の途中で時々、受付にいた女性の顔が浮かんだ。モザイクが掛った何人かの顔が浮かび、霧が晴れるようにモザイクが外れると、人違いと分かりがっかりした。数人目の女性の顔が記憶から引っ張り出され、もやもやしたイメージが徐々にくつきりし、指紋の照合のように受付の女性の顔と重なり合った。なーんだ、高校時代の数学の先生に似ていたのか、と西本は苦笑した。数学が苦手な西本は、宿題が解けないまま登校した。不安が表情に表れたのか、そんな時に限って容赦なく、その先生から指された。黒板の前で立ち往生した記憶が、教師の顔と共に蘇った。それ以来、数学にも女教師にも苦手意識が払拭されなかった。

出席者一覧表には女性の名前がかなり見受けられた。ざっとみていくと、指定された通り、ほぼ四十字程度でまとめている者も居れば、大幅にオーバーしている者もいた。我が儘な人もいるものだ、と西本は思った。

多士済々と云ったところで、自らのキャリアに基づいた自己PRを書き連ねていたが、中に

は自信満々でもついでに行けそうもない文章もあった。第二の人生を文筆業に転じて過ごそうとでもしているのだろうか、西本は異文化の世界に迷い込んできたような気がした。

スピーチに引き続き質疑応答が行われ、三人目の質問者が、質問と云うよりも自分の意見を述べ始めたので、司会の大島が適度のところで遮って講演会は終了した。引き続き懇親会の案内に移った。

懇親会は、専門学校近くの中華料理店で行われた。この日の講師も出席するとあって、二十人位が懇親会場に集まった。丸い中華テーブルが三卓用意されていた。西本は初参加でもあり、端の方の席に座った。ビールで乾杯した後、粗雑な盛り付けの中華料理の定番が手際よく並べられて行った。

暫くすると、出席者同士による手当たり次第の名刺交換が始った。西本は黙々とビールを飲み、料理をつまんでいたが、名刺交換の波が容赦なく押し寄せてきた。たちまち十枚ほどの名刺が集まった。一段落したところで、出席者一覧表を取り出し、心もとなない記憶を辿り座席と名刺を見比べながら、自己PRを読み直した。

やがて名刺交換の第二波が起った。偉そくに構えているのも気がひけたので、今度は自分から回ることにした。いよいよ別の卓の座っている受付の女性との対面である。

「初めまして。リジュンつものです」丁寧に挨拶し名刺を差し出した。「あら、丁度おたくのところの会員を止めようかと思っていたところよ」いきなりこんな事を言い出すなんて、やっぱり数学の先生と似ている、と西本は思った。「だって、お宅のは新しい技術に対応出来てないそうですわ」誰に聞いたか知らないが、遅ればせながら西本の会社でも最先端の技術を導入し、提供出来るようになってはいるはずだ。「えっ、うちでもやっていますから早まらないで下さい」「だって、仲間が変えた方がいいって、言っていましたよ」あらためて説明に伺います、と言って名刺を受け取った。

名刺には『cafe PERSON 小川泰代』と記載されていた。一回りして席に戻り、出席者一覧表を見ると、小川泰代のところには『新宿で喫茶店経営15年』と書かれているだけで、特にPR的な色彩の事は書かれていなかった。数学の先生みたいな女性が喫茶店の店主というのも意外であったが、自己PRをしていないところも意外であった。

(11)

西本の担当部門が手がけた個人顧客向け情報提供サービスが、親会社の幹部の目に留まり

苦情が寄せられてきた。風俗情報まがいのものではあったが、巷の夕刊紙よりはおとなしい内容なので、問題ないだろう、と西本は判断していた。親会社の意見は無視できず、社長も入って善後策が協議された。過剰反応ではないかと思っただが、多勢に無勢で西本に勝ち目はなかった。会社の総意として中止する事になり、当事者の西本が断りに行く事になった。

西本は、窓口として提供条件などを詰めてきた金村と津山を連れて、東新宿にある情報誌の会社に向かった。出掛けに名刺入れを確認したところ、先日の講演会で交換した名刺の束が未だ整理されずに残っていた。この前の女店主の喫茶店の住所も東新宿に近いくところであった事を思い出し、『cafe PERSON』の名刺をあらためて見直した。

情報誌の幹部との交渉は冷や汗ものであったが、何とか収まった。

「一息入れて行くかうか」金村と津山の顔をみた。

「この近く知っている喫茶店があるから、そこに行くかう」と言いながら、明治通りを新大久保方面に向かって歩き出していた。

名刺の住所を頼りに、明治通りから山手線側に一本入った路地を探しながら歩いた。「ご存知の処ではなかったのですか」金村が突っ込みを入れてきたところで、タイミング良くcafe PERSONの看板が目に入ってきた。

「ここだ」西本は何のためらいもなく入って行った。

喫茶店のイメージとは違った作りで、どちらかといえば定食屋のような構えであった。カウンター席が五、六席と、右側に四人掛けのテーブルが二卓あり、左側に五、六人が座れるソファの席があった。女店主はカウンターの中にいた。西本には気がつかず、淡々と注文を聞きにきた。三人ともアイスコーヒーを注文した。

飲み物が置かれた時、一瞬目が合ったが、未だ気がついていないようだ。

「あー、この間のメディア・ネットの講演会で名刺交換させて頂いた西本ですが」たまらずアップビールした。

「あっ、この間の。気がつかないでご免なさい」記憶には残っていたようだ。

「おたくのネット会員止めようかと思っっているんです」女店主は同じ話を繰り返してきた。これには一緒にいた金村と津山が驚いた。事前に何も話していなかったため、無理もない事であった。西本は、金村に今後の計画を詳しく説明するように促した。女店主は納得したように、しないように、どちらとも云えない顔をした。

「ここは夜はサッカー・バーを開いているので、夜も来て下さらない」

「木曜から土曜日までの三日間だけですけど」

「飲食店を開きたいと云う若者達が運営しているの」女店主は一方的に売り込んできた。バーのイメージとは更にかき離れている。

「それじゃ、今度来てみよう」西本は金村と津山の方に顔を向けた。

二人とも関心のなさそうな顔をしていたが、西本はサッカーをやっていただけに興味を覚えた。変わった店をみつける事も好きな方であった。

「金村くん、来週の木曜日の晩、空いているか」翌日早速、西本はcafé PERSON訪問の日程調整に取り掛かった。

「空いてますけど、何ですか」

「当たり前じゃないか、昨日行った店の夜に行く日だよ」と言いたかったが、ここは下手に出た。

「どつだ、昨日の店に行ってみないか、面白そうじゃないか」

「えー、ご執心のようなので行ってもいいですよ」

自分は興味ないが、半分業務命令のようなので聞いて上げますよとでも言いたげだった。もっと楽しそうに反応しろよ、と言いたかったが、『行って上げてもいい』と言われただけでもましか、と思いつまんだ。

食事は出来ないと聞いていたので、大久保通り沿いの『韓国家庭料理の店』に入り、ビールと焼肉、特製ちぢみなどの当り障りのない料理を控えめにとった。いつも行く大井町の焼肉屋とは、どこか味が違っていった。

「この辺はコーリアン・タウンで、味も本場風なんです」早稲田出身の津山が解説してくれた。そう云えば、ここへ来る迄の間、すれ違う人達の会話は日本語よりも韓国語の方が多かったように感じていた。

八時頃に cafe PERSON に向かった。薄暗い路地に、ぼんやりと店の看板が浮かんでいた。昼間とは大分趣が変わっていた。

カウンターの中は昼間みた光景とは異なり、大分すっきりしていた。後ろの棚には洋酒が並べられていた。カウンターには大き目の果物が積まれていた。

金村と津山は勧められるままに、グレープフルーツをたっぷり絞り込んだカクテルを頼んだ。西本は迷った挙句、いつものバーボンの水割りにした。

カウンターの男には見覚えがあった。

「確かメディア・ネットの講演会に出ていた人では」名刺は交換していないが、間違いないと思った。

「えー、河原と申します。先日はご挨拶出来なくてすみませんでした」飲食店経営希望と聞いていたが、差し出された名刺には、『サッカー&ワイン・ライター 河原幸男』と書かれていた。

「こちらは丁稚で」今度は河原が、カウンターの途中で大げさな動作でシェーカーを振っていた男を紹介した。

「つい最近までソフトの会社にいたんですが、実家が飲食関係の仕事をしてまして、本人もそちらに行きたいようです」名刺は持つていないようであった。

「丁稚と呼んで下さい」と言うので、西本は黙って名刺を渡した。

「大家さんはいないの」西本は試しに聞いてみた。

「泰代さんですか。連絡してみましょか」河原が素早く電話を掛け始めた。いいよ、いいよ、と言ったが、河原は大事な顧客とも思ったのか、取り止めなかった。暫くして女店主が顔を出した。

(三)

メディア・ネットの講演会には毎月のように顔を出すようになった。お互いに、一度に大

勢の人と名刺を交換するものだから、印象に残った数名以外は顔と名前が一致しない。後で出席者一覧表をみて、名刺交換済である事が分かり、しまったと思った事が何度かあった。

加藤啓子とは、二回目の参加時に名刺交換した。『ライター、『コピーライター』の肩書と、自宅と思われる住所が記載されていた。

「最近、インターネット関係の取材を頼まれる事が多いんです。分からない用語が出てきたりするので、勉強しておきたいのですが、一度教えて頂けませんか」西本の名刺をみて、すかさず依頼してきた。

「えー、いつでもいいですよ」西本は安請け合いました。

その場ではそれ以上話は進まなかったが、数日後、西本が出したメールに対する返事にも同じ事が書かれてあった。

西本は、どうしたらメディア・ネットの講演会へ出席した人達の顔と名前を覚えられるか、考えてみた。妙案は浮かばなかったが、メールのやりとりをすれば少しは足しになるのではないかと、と思い名刺にメール・アドレスが書かれている参加者全員にメールを出してみた。

多くの者から返事はきたが、たいていは挨拶程度の内容であり、具体的な事を書いてきたのは、加藤啓子が初めてであった。

あつと言う間に一ヶ月が経過した。次の講演会で加藤啓子と目が合った。

「そーでしたね。具体的に日程を決めましょう。候補日を二つか三つ上げて後でメールを送りますから」西本は翌日忘れずにメールを送った。

ようやく日程が決まった。場所をどこにするか迷ったが、無難なところ、café PERSON を選んだ。

蒸し暑い午後だった。café PERSONの客は近所の主婦らしき女性一人だけで、女店主を相手に世間話をしていた。

「今日は勉強会に場所をお借りします」西本は丁寧に仁義を切った。

アイスコーヒーを注文した後、用意してきた印刷物を取り出し、日頃セミナーなどで話している内容を、少し噛み砕いて説明をした。相手が望んだ内容に合っていたかどうか、自信はなかった。

一通りの説明が終わった後、女店主も加わり雑談が始まり、メディア・ネットの話や出版業界の内幕などが語られた。

メディア・ネットの集りに参加しているうちに、西本は前から抱いていた出版への思いが、次第に形になり身体の中に定着してくる事を感じていた。

「今度はこっちの方からのお願いだけど、出版について教えて貰えませんか」雑談のネタがいい加減途切れたところで西本は切り出した。

出版への思いが高まりつつあるとは云え、具体的にはどうしたら良いのか、いざとなると皆目見当がつかなかった。原稿を書いたとして、どこへ、どのように持ち込めば良いのか、或いは原稿の書き方だつて何らかのルールがあるはずだが、気軽に聞けるような者が回りにはいなかった。

貸しも出来たことだし、出版社との付き合いも長いようなので、加藤啓子は教えて貰うには格好の相手に思えた。

「えっ、本を出されるのですか」さすがに驚いた様子であった。

「サラリーマンから大学教授に転進した人と付き合いがあるのですが、その人が我々のネットの会議室に書いていたんだけど」西本は殆ど意味はないと思つたが、半分照れ隠しもあり、思い至つた経緯を説明し始めた。

西本が同僚とともに企画した、『米国IT利用動向視察団』は、参加費用の大半が参加者負担であるにもかかわらず、思いのほか人気が高く、大学教授や大企業のシステム部長などが参加した。帰国後、参加者を中心にネット上に会議室を開き、情報共有の場とした。固いテ

ーマだけでは飽きるので、井戸端会議的なコーナーを設け、くつろげる雰囲気作りをした。会員の一人が『私の目標、五十歳代でやっておくべきこと五つ』と称して小文を掲載した。ホノルルマラソンを完走すること、海辺に掘建て小屋を作ることなどと並んで、『共著ではなく単独で本を一冊出すこと』が上げられていた。共著では何冊か出しているが、単独では未だ出していないようであった。

「それを見て、いいなーと思い、自分も何か仕事以外で目標を持ちたいと思つただけど、その中で本を出すことに魅力を感じた訳です」

「せつかくなので、今やっている仕事の関連で、ネットのビジネスに関するものと、ネット社会に関するもの、それから」西本は自棄気味に話し続けた。

「それから」加藤啓子が相槌を打った。

「うん、笑わないでね。環境問題をテーマにした小説を一本書きたいな」西本は出版に関して他人に話すのは初めてであった。

「そんなに簡単なものではないですよ」加藤啓子はあきれたような顔をして言った。それはそうだろう。ライターの仕事で収入を得ているとは云え、誰でもいつかは自分の名前で本を出したい、と思つていられるであろう。加藤啓子はどうなのか分からないが、多分同じ思いで

あろう。西本は、ちょっと言い過ぎたかな、と思ったが、その場の流れに任せた。

「それでは今度、基本的なところだけでもお話しします」それを聞いて西本はほっとした。

今回は新橋で昼飯でも食いながら、と云うことになった。

「お昼ならうちでもやってますわよ」傍で聞いていた女店主が割り込んできた。四時近くになるうかと云うのに、片付け忘れたのだからか、昼食のメニューが未だ置いてあった。日替りランチとオムライス、カレーライス、ナポリタンが定番のようである。

「その日は時間的に、お昼にここまで来るのは難しいな」とっさに逃げを打ったが、いつかは昼も来てみようと思った。

加藤啓子はみるからに華奢な身体つきではあるが、文筆ではバイタリティ溢れる仕事振りであることが容易に想像出来た。ライターの仕事を生業にしているのであるうか、或いは、趣味の延長のようなものなのであるうか、どのようにして仕事を探しているのだろうか。サラリーマン生活にどっぷりと浸かってきた西本には、フリーで仕事をする人達が、別世界できらきらと輝く星のようにみえた。

昼飯を食いながら、加藤啓子は、彼女自身の仕事の現況を話し出した。最新の取材記事が掲載された、月刊の女性誌を取り出して、取材から原稿を書き上げる迄の過程を説明してく

れた。

「それでギャラはどの位なんですか」西本は単刀直入に聞いてみた。

「取材費は別にして、この程度です」片手を開いて前に押し出した。

「思ったより安いでしょう。それでも私は優遇されている方なのですよ」だから安易に本を出すなんて言わない方がいいですよ、と言いたげだった。

今回は飲みながら、と云うことになり、西本は新宿西口近くの馴染みの店を指定した。女性と二人で行くときには、カウンター席を取ることに決めていた。アルバイトと思しき、清楚な感じの女性がカウンター席を担当していた。

「私も昔、和食の店でお手伝いをしていた事があるの」帰りがけに加藤啓子から意外な話が出た。

「銀座一丁目にある、俳句で有名な女性が開いた店なの」西本は既に大分酔いが回っており、俳句の先生の名前や、そこで働くことになった経緯などは頭に入らなかった。クラブのような処でない事だけは記憶に残った。

秋も大分深まり、明治通りには枯葉が舞い始めていた。西本はcafé PERSONのカウンターで特製のカレーを頬張っていた。中では店主の小川泰代が、手際良く、飯を盛り付けたり、日替りランチの皿をトレイに並べたりしている。最近では、昼、夜ともに、すっかりこの店の常連になっていた。昼飯では、野菜のたっぷり入った特製カレーがお気に入りであった。近所に適当な昼飯屋が少ないせいか、PERSONは人気店の一つであった。昼間の時間に余裕が出てきたので、西本は昼休みを外して訪れた。食後のコーヒーをゆっくり飲みながら、世間話に興じた。西本の頭の中からは『女教師』のイメージは完全に払拭されていた。

小川泰代は十年ほど前に夫に先立たれ、兄夫婦とともにPERSONを経営していること、地元生れで早稲田を出て、今では稲門会の支部幹事をやっていることなどが分かってきた。

「年代的には吉永小百合と同期位ですか」聞きにくい事を聞いてみた。

「えー、同期ですわよ」泰代はあっさり答えた。

「凄いなー」西本は分けのわからない事を口走った。

café PERSONの夜の顔、サッカー・バーも重宝していた。新宿近辺での、二次会候補の一番手に入れていた。カラオケには興味がない西本は、相手が飲み足りない様子をみせると、

すかさずサッカー・バーに連れて行った。

「この近くに、ちょっとしたところがあるんだ」

明治通りでタクシーを降り、住居専用のマンションの玄関前を通り抜けてPERSONのある路地に出る。本来は通り抜け禁止のところだが、西本は密かに『けもの道』と呼んで愛用していた。明治通りの喧騒から路地裏の静寂へと、一瞬にして世界が変わるところが気に入っていた。相手も当然同じように思うだろう、と勝手に決め込んでいた。えー、こんなところに隠れ家があるんだ、とか言われると、一人で悦に入った。

昼間は週一回は顔を出すようになり、備え付けのスポーツ紙や週刊誌を読んで時間を潰した。

「こつ云つのもあるんですよ」泰代が小冊子を差し出した。表紙に達筆で『青丘』と書かれた句集であった。

「俳句などに興味はありますか」

「金子兜太、知ってる」西本は逆に、唐突に問い掛けた。

「勿論よ。大蔵省出身の人でしょう」日銀出身だが、どうでも良かった。

「わしは金子兜太の門下生なんだよ」

あながち出鱈目な話でもなかった。西本の勤務する会社では、四十五歳になると、三カ月間職場を離れて研修を受ける制度がある。ビジネス関係の講座が主体だが教養講座も織り込まれており、絵画、音楽、宗教、歴史、文学等と共に俳句講座もある。実際に句を詠ませられ、講師から指導を受ける事で、人気講座の一つに数えられている。

西本が受講した時の俳句講座の講師は金子兜太であった。演習の季題は、紅葉と夜寒、白鳥の三点であった。講師の辛口の講評も面白いが、中にはとんでもない迷句を詠んで、場を盛り上げる輩もいた。

「紅葉照るやつと揃った猪鹿蝶」

講師の金子兜太が読み上げる研修生の句に、湯河原にある研修センターの教室が、どつと沸き返った。

研修終了後、俳句講座に感化され、仲間同士で句会を始めたり、同人誌に投句したりする者も現れた。西本にも声が掛ったが、気乗りはしなかった。それでもたまには句を作り、俳句に本格的に取り組み始めた親友の二村に送って、コメントを求めたりしたが、それ以上には興味が湧かなかった。

「それで小川さんの句はどれなの」金子兜太の門下生だ、と云った経緯を一通り説明した

後、西本は『青芒』を広げながら聞いた。

「泰山木と云う俳号で出ているのが私よ」俳号と云う言葉は知らなかったが、ペンネームみたいなものだろう、『秦代』から一文字貰ったのだろう、と容易に想像出来た。

「泰山木ってどんな木だっけ」西本は植物の名前をあまり知らない。

「常緑樹で夏に白い花が咲く木よ。ご存知ないですか」そう云われても、ぴんとこなかった。

「かなり大きくなる木ですよ」秦代の説明を聞き流しながら、西本はぱらぱらと頁を捲った。

「この句はいいですねー」西本は平易な言葉で詠まれた句を差して、型通りの誉め言葉を放った。俳句特有な用語を使った泰山木の句が他に四句ばかり掲載されていた。

(五)

「この近くに行き付けのところがあるんだけど、もう一軒どう」西本は長田と吉川を誘った。同窓会の流れで、銀座七丁目にある吉川の馴染みの店で飲み直しているうちに、自分も格好を付けなければ、お返ししなければ、との気持ちになっていた。近くに知っている店があ

るので、そこへ案内することにした。

『香織』はたまに使ってはいるが、『行き付け』と云う程ではなかった。沖縄出身のママが一人で切り盛りし、特長と云えば、ギターやピアノの生演奏をバツクに女性歌手の卵がジャズのスタンダード・ナンバーを歌っているところ位であろうか。

「この店来たことあるな」長田は店内をきよるきよる見回し、正面の等身大もあるつかと云う美人画のところを視線を止めて言った。

「やまちゃんと同じ高校の同窓会じゃなかったですか」香織のママが口を挟んできた。

「そうだ、あの時は盛り上がったな。ママ、よく覚えてるね。感心するよ」長田が続けた。

「そうよ、商売ですから」ママが軽く切り返す。

「山田君、きている」長田が訊ねた。

「きているわよ。先週も水曜日に突然電話があつて、何でも、ゴルフで会費制かと思つたら、招待だったのでお金が浮いたから、飯でも食おうかつて。豪華なイタ飯ご馳走になつちやつた」ママは浮かれ気味だ。

「ひよつとしたら、やまちゃんて、週間言論の山田さんのこと」それまで静かにしていた

サクラビール宣伝部長の吉川が会話に加わつてきた。

「そうよ、編集長の」

「なーんだ、そのゴルフに招待したのは私だよ。と云うことはママの食つたイタ飯は俺がご馳走したつてことか」一同大爆笑となつた。

笑いの渦が引きかけた頃を見計らつて、店内の隅の小さなステージで演奏が始つた。ピアノとベースの伴奏をバツクに女性シンガーが『マイ・ファニー・バレンタイン』と『この世の果てまでも』の二曲を続けて歌つた。

「あのピアノを弾いている子は慶応出身なの」香織ママは聞きもしないのに説明し始めた。

「ベースの方は北大出よ」一流大学を出たミュージシャンの卵を面倒みている、とても言いたいのだろうか、西本は量りかねた。

「何かリクエストはないの」

「それじゃー、テネシー・ワルツでもお願いしようか」西本は自分の好みのカントリー・ミュージックの中から、一般にも比較的知られた曲を選んでリクエストした。

「この他にテナー・サククスとギターの子がいて、日によって入れ替わるのよ」香織ママが自慢気に話し続けた。

リクエストの曲が始まった頃から、長田がしきりに携帯でアクセスしている。どうやら他の店に連絡しているようだ。

「じゃー、もう一軒行こうか」曲が途切れたところで、今度は長田が誘ってきた。

深夜近くになっていた。長田はすっかりとした足取りでコリドー街の方に向かって歩き始めた。大手広告代理店を三十半ばで辞めて、テレビ番組制作会社を立ち上げた長田のことだから、銀座は自分の庭みたいなものだろうな、と思いながら西本は黙ってついて行った。

コリドー街近くになると、銀髪の長田がまるで巢に帰ってきた鳥のように、迷うことなく古びたビルに入って行った。西本も続いて入って行った。くすんだ壁の色や淡い光線などが五感にまとわりついてきたが、違和感はなかった。直感的に、来たことがあるビルだ、と思った。大人になった鮭は大海を彷徨した後、生れ故郷の小さな谷川に帰ってくると云われるが、旅程で得た全ての情報を、研ぎ澄まされた五感を駆使して体内に蓄積し、帰趨する時の羅針盤としているのだろうか。鮭と同じ情報蓄積の仕組みをコンピュータで作ったらどうなるだろうか、と思いながら西本はエレベーターに乗った。

六階で降り、直ぐ右にある『MOE』の扉を開いた。店の名前に憶えはなかった。中に入ると、大きな窓がコリドー街に向かって開かれ、高速道路を往来する車のライトが反射してい

た。古びたビルからは想像出来ない明るさで、眺めている中に吸い込まれそうな錯覚に陥った。十数人が座れる長いカウンターが張られ、中央の大きな花瓶には、新芽が出掛かった楓の枝が覆い被っていた。

「この店、来たことあるな」まるで『香織』における長田の言葉を繰り返すかのよう西本が呟いた。

「そうよ、草野さんと一緒にしたよ。大分酩酊されていたご様子で」カウンターの中からママらしき女性が声を掛けてきた。そうか、取引先の幹部の草野に連れられてきたのはこの店だったのか、西本は記憶を辿った。

「あらー、吉川さんも一緒に今日は何ですか」

「同窓会だよ」

「えー、じゃー長田さんも同じ大学なの」

案内してきた長田ではなく、同行の吉川とママらしき女性が軽妙に会話を交わしている。どうやら吉川もこの店の常連らしい。

「情報誌の編集を担当している時に、取材に同行して来たのが初めてで、それ以来の付き合いだ」

「こちらがママさんで、その昔は電機会社で〇〇をやっていたそうだよ」吉川がゆったりとした口調で説明し始めた。

「俺の方はスポンサー筋の常務に連れられてきて、それから時々打合せに使わせて貰っているよ」長田も続けた。

「ここはね、作家や雑誌の編集長何かもよく来るんだよ」と吉川が顎でカウンターの奥を差し示した。ここでは、最近、ドキュメンタリーもので名を上げた作家の山瀬孝次郎とその連れが帰り支度を始めていた。

山瀬が前を通り掛ったとき、長田が呼び止めて、手を差し出した。釣られるように出された山瀬の手を両手で握りしめ、目を見つめながら長田が言った。

「ゆー、頑張っているな」

山瀬は何も答えずに立ち去った。

「誰でも一つは小説を書けるものなんだよ」吉川がぼつりと言った。

サクラビールの宣伝部と云えば、多くの作家を輩出した事で有名だが、吉川も作家を目ざして入社したのであろうか。本を出してみたい、と漏らした自分に対する戒めの言葉なのだろうか、西本は別の機会に聞いてみる事にし、話題をこの夜の二つの奇遇話に転じた。

「何だ、『香織』でも『MOE』でも三人はつながっていたのか。俺達は仕事は一緒にやった事はなかったけど、似たような場所で動いていたんだ。結局は狭い水槽の中で泳ぎ回っていたんだな」

傍で黙って聞いていた吉川が大き目のメモ用紙を貰うと、二つ折りにし、ポケットから取り出した万年筆で、上の段に小さな円を二つ描き、下の段には大きな円を二つ描いた。大きな円の方は一部が重なり合っており、その部分に斜線を引きながら言った。

「人は活動の幅を広げると、世間は狭くなるってことかな」

(六)

西本は『香織』に通う回数も少なく、金も余り落とさなかったが、長田絡みで常連同様の扱いを受けるようになった。他にこれと云った店も知らないもので、何かある時は『香織』を使った。

香織ママは時々、この道に入った経緯を話すようになった。親は教師で、兄や姉妹は医者や教師になったが、自分は馴染めなかった。〇〇になったが、独立したくて脇道に入ってしまった。色気では勝負出来ないことは最初から自覚しており、ビジネスマンが喜んで来てく

れるような店作りに取り組んでいる。つなぎ合わせると、ざっとこのような物語になる。

「おー、少年は元気か」

大声を出しながら、豪放磊落で知られる西本の会社で一年上の竹本が入ってきた。一年前に役員に昇進していたが、行動には些かも怯むところがなかった。

「こいつは銀座のママだけど、少年だから」と香織ママの肩を掴んだ。

「これとやる時は、こっちの方から入れなきゃだめなんだ」とママを抱きかかえ、尻の辺りを擦った。

大柄な竹本に吊り上げられて、小柄なママは足をバタバタさせてもがいた。店内にいた客はあっけにとられ、驚きながらも滑稽な有り様に笑いを爆発させた。

そうか少年なのか、見掛けもそのようだが、いつも夢見ているところは少年そのものではないか。それにしても少年の夢がクラブ経営とは、西本は可笑しくて仕方なかった。

数日後に西本は『香織』の奥の席に座った。これだけ間を空けずに顔を出すのは初めてかも知れなかった。昔同じ職場にいた武藤修と一緒に座った。武藤は西本より一回り近くも年下だが、早めに退職しソフトハウスを経営していた。独立直後は苦労したようだが、有力な顧客を掴みそこその成功を収めていた。西本とは馬が合うのか、時々声を掛けてきた。

この日は、武藤が鼻屑にしている新橋の小料理屋で世間話に興じ、退職者の近況や噂話で盛り上がった。二本目の焼酎のボトルが空きかけた頃合いを見計らい、西本は『香織』へ誘った。

未だ早い時間だったので、他の客はいなかった。新橋の店で大分飲み、勢いがついてしまったのか、水割りを飲むピッチは上がった。香織ママの自慢話にも似た話が武藤には面白かったようだ。顔をつなぎたくなったのかも知れない。西本がトイレから戻ると、クレジットカードを取り出し支払いを済ませようとしていた。すったもんだの拳句、しぶしぶ武藤の支払いを認めた。

「これじゃー悪いから、来週の水曜日に一丁目にある卯波という店でご馳走するから、付き合ってくれないか」西本は加藤啓子からのメールを思い出して、武藤を誘った。

二日前に届いたメールには、『十二日の水曜日に急遽、以前お話した卯波と云う店にお手伝いに行くことになった。もう行くことはないと思っていたが、店長からどうしてもと懇願されて、受けることにした。この日予定していたアルバイトの娘が、新劇の舞台の都合で来れなくなったので、その代役である。よかったら、来て下さい。場所は銀座一丁目、並木通りを京橋方面に行き、小さな稲荷の先の路地を入ったところにある』と記されていた。

『行くよ』とだけの簡単な返信を送っておいたが、一人で行くのか、誰かを誘って行くのかなどは決めていなかった。

「和食の店で、ちょっととした知り合いが手伝っているんだ。新劇の女優の卵がアルバイトで来ているらしいよ」武藤が関心を持ちそうなネタを持ち出した。

「私も行きたーい。連れてって」突然、香織ママが割り込んできた。目を見ると、まさか断らないでしようね、と云わんばかりの凄みを感じられた。

「卯波は淳一先生の次の連載の舞台になったところよ。知らないの」良いとも悪いとも言わないうちに、捲くし立ててきた。西本は日経新聞の連載小説を読んでいない。さすがに渡辺淳一の『失樂園』位は話題になったので知っていたが、その後の連載については作者も題名も記憶になかった。

「瀬戸内寂聴の小説よ。俳句で名高い主人公が開いた店で、是非行きたいと思っていたの。うちのお客さんも、今度連れて行くよ何て言いながら、未だ連れてつてくれないのよ。朝日の人なんか何度同じことを言ったか分からないわ」西本は、以前加藤啓子が『俳句で有名な女性が開いた店』と言っていた事を微かに思い出した。

「私ねー、この前、真砂女の生れ故郷の館山まで行ってきたの。卯波ってどんな波か、見

たくなつたの」やっぱり少年だ、と西本は思った。

結局、三人で行く事になり、水曜日の六時に有楽町駅前にある交通会館の入口で落ち合う事に決った。この間も、休みなく水割りを飲み続けた。

(七)

六時になっても、交通会館の入口には一人の姿はなかった。西本は後悔した。いつもなら、口頭での約束事は、翌日メールを出し確認するのだが、『香織』での一件は確認を怠っていた。悪い予感がした。武藤はかなり酔っていたので、忘れているかも知れない。それにしても香織ママはどうしたのだろうか。あれだけご執心だったのだから、まさか冗談と云うことはないだろう。

慌てて武藤の携帯に電話を掛けたがつかまらない。苛つきながら数回掛けたところで、ようやく武藤が出た。ところが、幕張の自宅近くまで帰ってきたので今夜は勘弁して欲しい、と懇願してきた。やはり、忘れていたとの事だ。仕方なく、『香織』に電話を入れた。歌手の卵を兼ねたスタップらしい女性の声で、『西本さんから電話が入ったら、直接行くからと伝えたい、と云うことです』と返事が返ってきた。

西本は並木通りへと急いだ。稲荷の前で、仏頂面した香織ママと出合った。

「今、卯波に行ってきたけど、西本さんの予約なんてない、と言ってたわよ。どうなってるの」今にも切れそうな顔つきである。

「そんなことないはずだよ」と言ったものの、店の様子が分からないので、西本は不安になった。『行くよ』とだけ返信はしたが、時間や人数については何も連絡していなかったため、予約は確定していないのかも知れない。

「ともかく行ってみよう」と香織ママの肩を押した。

店内を覗いてみると、カウンター席の手前側に二人分の空き席がみえた。店長らしき男がカウンターの厨房で庖丁を動かしている。その奥で鍋から煮物を取り出している加藤啓子の姿がかるうじてみえた。これでは、『西本の予約』と言っても聞こえなかったのかも知れない。

「あのー、加藤さんの知り合いの者ですが」恐る恐る申し出ると、加藤啓子が気付いて、店長らしき男に何やら囁いた。

「二人ですか、それでは丁度手前の席が空いたので、そこにして下さい」店長らしき男に指示され、二人はようやく落ち着いていた。

香織ママはビールを飲まないで、西本は自分用のビールと熱燗を注文した。メニューを見ると、刺身から煮物、焼き魚など普通の和食の店と同じような料理が一通り揃っていた。

香織ママはすっかり落ち着きを取り戻し、念願が叶ったためか、先ほどの仏頂面はすっかり消えていた。本来の弁舌が滑らかに回り始め、西本は聞き役に回った。

「先ほどは失礼しました」カウンターの前の男が『店長』の名刺を差し出してきた。身内の者からの誘いの客、と云う事で気を使っているようであった。

「奥で会食すると、何人位入れますか」西本は店内を見回しながら聞いてみた。カウンター席は鰻の寝床のようで、入り口の左側に二名、奥に向かって五、六名程度座れるようである。カウンターの先には畳の部屋が見える。

「三、四名から十名位まででしょうか」誠実そうな店長である。奥をみると、加藤啓子は今度は揚げ物をあげているようである。ジーパン穿きのラフな服装しかみたことがないので、エプロン姿が新鮮に映った。

ふと、女性と二人連れで来た事がどう思われるだろうかと心配になった。武藤が脱落してしまっただけで、形の上では、店に出る前の銀座のクラブのママと同伴で食事してきた、と云う構図になる。西本は、ネオン街には『同伴出勤』と云う言葉がある事を思い出したが、心

配は直ぐに解消した。何しろ連れは『少年』だ。まさか、銀座のクラブのママにはみえないだろう。同じ職場の女性か、仕事関係の人と思ってくれるだろう、と安心した。

『卯波』の建物は大分年季が入っているようで、郷愁を誘うようなところがある。料理も悪くないし、話題性も十分にある。このような店を好む友人知人の顔が目に見えた。ここは使える店だな、と西本は直感した。

香織ママは上機嫌で、弁舌も食も進んだ。結局、二人で熱燗五本を空け店を後にした。並木通りに出ると、香織ママはふわふわと舞い上がるように歩き、車道に飛び出しそうになった。西本は慌てて腕を抱きかかえた。夢心地とはこのような状態を云うのだろうか。焦点が定まらない様子で、誘えば無抵抗のまま、どこへでもついて来てしまいそうな気配であった。この前の晩に竹本が、大声で言っていた例え話を絵にしたような痴態が一瞬脳裏を掠めたところで、今度は香織ママの方から凭れ掛かってきた。

「私ねー、うちのお客さんから、卯波に行く時は一句詠んで行くんだぞ、と脅かされてねー、俳句を作ってきたのよ」今迄肩透かしを食わされ続けてきただけに、常連客に向って、誘われて卯波に行くことになった、と自慢気に喋ったに違いない。話の中に自分の名前も出されたのか、と思うと気恥ずかしい気持になった。

「へー、どんな句なの」

「春雨に濡れて銀座を闊歩する」

「今日はお店に行かないよ」西本はママと一緒に『香織』に行く気にはなれなかった。

「いいわよ。ねーお腹すいてない。今度は私が奢るから中華でも食べていかない」香織ママも、直ぐには商売に入って行きたくないような雰囲気であった。余韻を楽しみたかったのかも知れない。それにしても恐ろしい食欲だ。迫りに押され、洪々、近く中華料理店に入った。

西本は『卯波』を暫くの間、集中的に使ってみようと思った。先輩から、新しい店と入魂になるためには、初めて行った直後に頻繁に通う事だ、と教えられていた。幸いなことに昼食もやっていて、お昼後に有楽町近辺に来た時は必ず立ち寄った。昼後に有楽町近くに出られるように、本来の業務を調整したりして、週一度は顔を出すようになった。並行して新大久保のcafe PERSONにも週一回は通っていた。

「今日はコウエンですか」西本はどきつとした。今まで日比谷公園にいた事を何故、店長は知っているのか。西新橋にある取引先で打合せが終わったのが、十一時を過ぎていた。午後は神田にある会社を訪問する事になっていた。大井町の事務所に戻っても中途半端なので、

日比谷公園で日向ぼっこをしてから、『卯波』で昼飯をとる予定を組んだ。爽やかな風が流れていた。ベンチで読み掛けの本を捲りながら、ゆったりとした時間を過ごした。

「エンダイは何ですか」さすがに俳句の店だけのことはある、ベンチの事を縁台と云うのか、と感心したが、直ぐに『縁台は何か』と云う言葉の使い方はおかしい事に気づいた。何んだ、『講演の演題』のことか、と独り笑いをした。店長から、おたくはどんな営業をしているのか、と聞かれ、個別訪問は難しいので、セミナーを開催し会員を集めたりしている、自分も講演することがある、と説明した事を思い出した。

会合にも使うようになった。先頭を切って役員に昇格した同期生の祝いの会の会場探しを、幹事から依頼された。出席者はごく親しい者だけに絞られていたので、『卯波』はぴったりであった。

早速、『卯波』を予約し、幹事の代理で案内メールを出した。案内文に、『尚、ここは俳人鈴木真砂女が開いた店であり、客人は一句詠んでくることが義務づけられているので、よろしく』と追記した。出席者は社内研修で金子兜太の薫陶を受けた連中なので問題はなかつ、と考えた。

会の席上では俳句の話は出なかった。閉会后、数名が句を用意してきた事を表明したが、

時すでに遅しで、披露する機会は失われた。

数日後、出席者の一人に『卯波』の評価を聞いてみた。

「あの店には二度と行きたくないよ」西本はびっくりした。

「傘を忘れたので、翌日、近くに行ったついでに、取りに寄ったんだ」西本は真剣に聞き入った。

「店長に挨拶しながら、自分も俳句をやる、と言ったところ、カウンターの客から、どんな句を詠むのかと聞かれてな」意外な展開に興味が湧いてきた。

「折角なので、この前用意していった句を披露したんだけど」同期生は悲しそうな表情をした。

「途端に店内がしーんとなってしまったんだ。俺は二度と行かないよ」西本は、同期生に同情するとともに、カウンター席では俳句の話は慎もうと誓った。

(八)

「たまには違うところに行きたいけど、どこかいい処ないかな」外村健三が新年会の会場を探していた。

外村とは大学のクラスが同じで、学生寮での部屋も近く、外村の予備校時代からの学友も加え、五、六名で何かにつけて行動を共にしていた。卒業後も親交は続いたが、一時は業務多忙や海外駐在などの者が多く、交流は途切れがちであった。サラリーマン生活も終盤に近づくと、旧交を温める機会も多くなり、忘年会や新年会を定期的に開くようになった。外村が幹事役を引き受け、いつもは大学のO&B会が運営する施設を使っていたが、毎回同じ処なので皆飽きがきていた。

西本は、ここぞとばかりに『卯波』を推薦した。他に適当な候補もなく、すんなりと決まった。西本が案内状を出すことになり、俳句には縁のない連中が相手で心配もあったが、『一句詠んでくること』と懲りずに悪戯を仕込んだ。

一月中旬に、西本、外村、春山勇太郎の東京組三人に、石巻の石川敏夫、名古屋の川本祐一を加えた総勢五人が『卯波』の広い方の座敷に集まった。店の古びた佇まいや、鍋一つを囲んで顔を付き合わせる雰囲気、学生時代の記憶を呼び覚ましたのか、思いつきあり政治論議ありで大いに盛り上がった。焼酎のボトルが次々に空いていった。

雑炊が出された頃、石巻からやってきた石川が思い出したように、

「俳句を作ってきたけど、どうすればいいの」と独特の訛りで言い出した。

「俺も作ってきたよ」東京組の外村も続けた。

全員が西本の顔を窺った。

「ごめん、ごめん、ちよっとしたジョークだよ」西本は、まさか二人が詠んでくるとは思っていなかっただけに戸惑った。自分自身は用意していなかったもので、ばつが悪かった。

帰路は驚沢してグリーン車に乗った。『卯波』での新年会を振り返り、即興で詠んでみることにした。メモ用紙を取り出し、何でもいいやと自棄気味に十句ばかり書きなぐり、翌日お詫びの言葉を添えて全員にメールを送った。同時に、他の二人の句も加えて、小川泰代と二村にも送ってみた。

直ぐに二人から反応があった。やんわりだが、辛辣なコメントが記載されていた。小川泰代の返信メールには、数句に添削が施されていた。西本はそのまま、仲間に転送した。

添削して貰えるのならば、石川はどんな句を送ってきたが、元より約束事でもないもので、コメントや添削は途切れた。他の連中も、こんなのかな、と句を送ってきた。メールの交換をしているうちに、春山から『ネット句会』の提案があった。西本も面白いとは思ったが、ネット上でどのように運営すればいいのか、見当もつかなかった。無理もないことで、そもそも句会の流儀すら知らなかった。

小川泰代に相談してみたが、小人数で直ぐに使えるネット句会用のソフトは出回っていないようであった。

「あまり固く考えないで、誰かがまとめ役になり、皆さんからメールで送ってきた句を一覧表にして、それを送り返し、選句して戻して貰えばいいじゃないですか」泰代がヒントを与えてくれた。

東京組の西本と外村健三、春山勇太郎の三人が集まり、具体的検討の場を持った。西本としては、俳句に取り組みたい気持はあったが、社内研修仲間の二村達は遥かに先を行っているので、今更合流は無理と思っていた。

「俺としては俳句の基本的なところから勉強したいんだ」西本が切り出した。

「そうだな織田のような達人が出てきて、いきなりあれこれ言われてもかなわない」外村の言葉に、俳句の本を出した同窓生の顔が浮かんだ。

「誰か適当な先生はいないかな」春山が思案気味に言った。

「うん、そうだな、この間、添削してくれた人がいただろう。彼女に頼んでみようか」西本は、小川泰代が受けてくれる可能性は五分五分かと思いつながら答えた。

「彼女は幾つ位なんだ。どう云う付き合いなの」

「ちょっととした仕事の付き合いでな、早稲田で吉永小百合と同期だよ」

吉永小百合と同期と聞いた途端に、外村と春山の表情が変わった。

「別に小百合ちゃんと親しい訳ではないよ。頼めば会える訳でもないし」

西本から小川泰代に依頼してみることになり、後はいつもの雑談に移った。

いざ依頼するとなると、具体的には何をやって貰うのか、謝礼はどうするのか、問題は山積みである。いい加減な頼み方をする、と、ぴしゃりとやられるかも知れない。久し振りに数学の先生の顔が浮かんだ。

「この間、相談したネット句会のことだけど、ネット上での運営については我々で考えるとして、全員がそもそも俳句の基本的なことを知らないの、手ほどきをお願い出来ればと思ってるんだけど」西本は探るように、直接聞いてみた。

「私だって、たいしたことやってないし、専門家でもないし、お仲間の一人として一緒に勉強することでしたら、いいですよ」暫く考えた後、小川泰代が概ね了解と取れる返事をしてくれたので、西本はほっとした。

「ぎつくばらんに言って、謝礼はどの位出せばいいですか。皆目見当がつかないもので、切り出してはみたものの、西本は、ひょっとすると謝礼のことなど聞くのは失礼ではないか、

と思い始めた。他の事例をよく調べて、妥当な額をそつと渡すのが筋ではないか、とも思った。

「謝礼なんていいですよ。一緒に勉強させて頂ければ十分です」やはり間かなければ良かった、と後悔した。

言い出した以上、放っておく訳にはいかなかった。翌日早速、外村らと相談してみたが、他の連中にしても相場が分からないのだから、結論は出なかった。西本は一か八かの気持で、句会の飲食代などは全てこちらで負担する、との案を提案し、二人の了解を貰った。言い出しにくかったが、これも役目と思い西本は、意を決して小川泰代に伝えた。折角、彼女から『数学の先生』のイメージが払拭されたにもかかわらず、今度は『俳句の先生』になってしまった。

一週間後に、再び三人で打合せの場を持った。

「まずは俳号はどうするかだな」外村が口を開いた。自分については既に腹案があるようであった。西本も、ネットのコミュニケーションで使っていたペン・ネームの鳥井閑をそのまま使うことに決めていた。いずれにしても、全員にメールで確認することにした。

「次に会の名前だけど、一番遠い石巻の石川に敬意を表して、『石の会』と云うのはどうだ

ろう」外村は紙にこそ書いてはこなかったが、必要な事柄は整理してきたようだ。

「俳句の会にしては少し固いと思うけど、拘らないよ」西本は、いずれにしても暫定的なものだろう、と思った。

「特に対案もないし、いいんじゃないの」春山の一言があり、『石の会』に内定した。

次いで西本が、小川泰代から聞いたヒントを基にまとめた、ネット上での運営方法の案を報告し、了承された。

「句会と云うと、みな押し黙って暗い雰囲気になるらしいよ」外村は、この一週間で、俳句について大分勉強してきたようだ。

「今更、達人になろうと云っても無理だろうから、我々は明るい句会を目指したいな」

「楽しく酒を飲むための『肴』位の位置づけがいいと思うよ」外村がテンポよく喋り続けた。

「そつだな、『笑つ句会』と云うのはどうだろう」春山の提案に西本も同調し、この会のキヤッチフレーズにしよう、と云うことになった。

「第二の人生を迎えるに当たって、やる事が一つ見つかったよ。手軽に出来そつだし、楽しく飲めそつだし」外村はどんどん先に進んで行った。

「実はな今、個人的にセカンドライフ・プロジェクトと云うのをまとめているんだけど、まーたいした話ではないけど、これから先、何か目標を作ろうと思っていたところなんだ。丁度よかった、俳句も目標の一つにするよ」春山も調子に乗ってきた。西本は期待が膨らみ過ぎることを警戒した。

「まーまー、未だ始まっていないんだから」

この日の話は西本がまとめ、全員にメールで送りを承された。俳号も全員がすんなりと決めて送ってきた。西本は予定通り鳥井閑とし、小川泰代は『青芒』の泰山木を踏襲した。後は素頓と摩天坊、堂一兔、麻入汰となった。

そうこうするうちに、仲町も入れたいけどいいか、と石川が聞いてきた。いいも悪いもなかった。打診したら入れない訳にはいかない。仲町照正は外村や石川と同じ予備校の寮で青春時代の一こまを送った仲であった。他の大学に行ったが、外村達の所へ遊びにきていたので、西本も学生時代から知っていた。就職した会社が、西本の会社と合併して同僚となったが、仕事上での接点はなかった。仲町は出身地の熊本で食品会社を営んでいる親友から、現役のうちに声が掛って、その副社長に転進していた。石川が旧交を温めに訪問した折、ネット句会へ誘ったようだ。俳号を均光と称して参加することになった。

(九)

五里霧中の感はあるが、ともかくネット句会を始める事になった。第一回の季題は協議の末、「菜の花」となった。各自五句づつ詠んで西本宛に送り、一覧表にして送り返し、特選一句と並選四句を選んで、再度西本宛に送る方式である。外村の提案で、一句毎にコメントをつける事となった。まとめ役は適当に替われば良いだろうと、全員が納得した。特選、並選と云う用語も目新しかったが、この辺りのことを含め、小川泰代を巻き込んでおいたのは成功であった。いつしか小川泰代のことを『泰山木先生』とか『泰山木宗匠』とか呼ぶようになった。

選句、コメント追加えた一覧表が完成し、いよいよ、それを肴に飲む会を開く番になった。この段階で『句会』と云うのもおかしいので、『合評会』と呼ぶことにした。三月下旬の予定で、『卯波』を予約した。石巻と名古屋、熊本の三人は今回は無理であった。

『卯波』を予約して暫くした後の三月中旬、西本は新聞をみて驚いた。『鈴木真砂女さん死去』の記事が大きく掲載されていた。二、三日後の日経新聞の文化欄には瀬戸内寂聴の追悼文が載せられた。西本は寂聴の小説を未だ読んでいなかったもので、真砂女の生涯を新聞記事

により初めて知ることになった。

「予定通りで大丈夫なの」泰山木宗匠から問い合わせがあつたが、推移を見守る他はなかつた。

『合評会』は予定通り、三月下旬に『卯波』で開かれた。奥の座敷の小さな台には、真砂女の写真が飾られ、紫木蓮の小枝が捧げられていた。

「由緒あるところで、句会など開いて不遜ではないかしら」長年俳句に親しんできた泰山木宗匠は、鈴木真砂女と『卯波』の重みを十分過ぎるほど理解しているのである。心配顔であつた。

「真砂女さんも、俳句の底辺が広がることを喜んでいらっしゃいますよ」西本が何の根拠もないのに、偉そうに言つたところで、ビールが出てきた。

「真砂女さんに、けんぱーい」自然発生的に全員が一斉に声を上げた。

「三杯飲んだところで、本来の『合評会』に移つた。一句一句、宗匠がコメントしたり、手直ししたりした。

「この句は上五と下五を入替えた方が良いと思います」なるほど、まるで魔法にかかつたように、句全体がすつきりするではないか。

「それから、言つておきますが、どんな句でも途中でスペースを入れないで下さい」基本的なことに対する注意もあつた。

西本達も、急遽勉強した薄っぺらな知識を取り出して、批評を試みたが、元よりのを得ていなかった。直ぐに宗匠に一蹴され、大笑いとなつた。

この間、ビールと焼酎がどんどん消費され、賑やかな『合評会』となつた。

「こんなに笑つた俳句の会は初めてだわ」泰山木宗匠は、なお笑い続けた。

(完)